

物価史研究から「匁銭」へ

藤 本 隆 士

昭和三〇年代、われわれは、九州大学の秀村選三先生の下に集って、「近世物価史」の共同研究を始めた。統計数字をもたない近世期の物価変動を捉えることができるのか、という基本的な問題が先ず立ちふさがった。このような概念規定を議論していたら、実証的な物価史料を提示することはできないだろう、という結論になった。中央市場のような地域ならば、ある程度まとまったことができるだろうが、九州のそれを、どうやってまとめるかなど考えれば、不可能であることは明らかであった。結極、ある一地点で、連続して史料が揃っているところを選ぶ以外に方法はないだろう、ということになった。それならば何処の何家文書が良いか、とに角、実際に当ってみることにした。

た。九大にある九州文化史研究所が所蔵する膨大な史料の中から選ばなければ、今から地方文書ぢやうたを探すことは、とても不可能であろう。九州文化史研究所の存在は、西南地域の中世以降の研究に絶対欠くことのできない、重要な存在であることは、周知のことである。もしこの研究所の重要性を理解しない人があれば、少なくとも歴史研究者の資格に欠ける、といってさしつかえない。かくてこの研究所蔵文書から、西国郡代がいた天領日田で、掛屋をして、なおかつ醸造を行い、多くの小作地をもっていた千原家の店（棚）卸帳が、候補に上ってきた。中期から毎年記帳されて幕末に及んでいたからである。

千原家の店卸帳を検討し、実際に作業を進めてみた。し

かし、店卸帳には大きな限界があることに気づいた。いうまでもなく店卸しは、一年の分を大晦日(当時の会計年度は一月から十二月までが一般的であった)を中心に行っていること、内容が、現金有高、貸付高、総商品の合計高などであつて、同家の経営的年次変遷を辿る研究には極めて面白い史料であるが、個々の物価、それも日々、月々のものは、明らかにできないことが障壁となつてゐることが分つてきた。

それでは候補を挙げねばと各人いろいろと提出したが、その量においても、同種名の史料が揃つてゐるということ、天領天草御領村の石本家の史料から選ぶことになつた。ところが同家の史料は余りにも膨大であつて、その選択もひと苦労であつた。最初に目にとまつたのは、享保五年から天保十二年まで続いている「銀貸帳」(長帳形式)であつた。中には表紙が欠けて年代不明のものもあるが、大体一年に一冊が基本であり、中には一年に二冊あるいは三冊あるのもあつて、総計一五九冊である。しかしこれは、その名の通りに貸付あるいは掛売り残高の帳簿であつて、物価を辿るには適してゐないという結論となつた。そこで結局選んだのは、寛延四年から、欠年があるものの、

天保八年まで五二冊ある長帳の「萬賣買扣帳」と取りくむこととなつた。

この帳簿を各人まず一冊ごと担当したところが、多くの困難が待ちうけていた。確かに商品は一品ずつ計上されてゐるが、まずその商品の単位が、斤・貫・本・組・匹・反・荷など一単位が何か分らないものが出てきた。さらにその商品が売るか買いか、賣掛金の受取りの時、それに利子が付いてゐるか否か、その利子の率はいくらか、売掛期間はどの位の長さだったのか等々が必しも明らかでないことに悩まされた。しかしさらに困難を極めたのは、貨幣の計算方法が分らないことであつた。当時の人には当り前のことであつたであろうことが、現在のわれわれにはこんなに難しいものだったのかと恐しくなつてきた。初めは単位を出すのに四苦八苦しなから、加減乗除を一日中くり返えず状態が続いた。ただ現在のように電卓がない時代であるから、加減はなんとかソロバンでこなすが、乗除になると紙と鉛筆で行うほかなかつた。それも貨幣の明確なものだけで、単位も貨幣の計算方法が分かる時だけであつた。そのうち、タイガーの手廻し計算器を、どこかの課から二〜三台借りて、ようやく乗除もできるようになつた。そのため

文化史研究所は、朝からガリガリ音を立て、チンといった
ら一桁ずらしたり、今度は手前に手廻ししてまたチンがな
ると一桁ずらすという作業が続けられた。私たちの年代の
方々は御経験をお持ちであろう。それは騒然たる有り様
で、文化史研究所では、他の方は勉強はできなかっただろ
うと思われる。

ところがさらに難問に突き当たった。それは銭貨でありな
がら、あたかも銀貨であるかのように、例えば

一 銭壹貫五百目

という記述に突き当たった。どんな貨幣なのか分らないし、
その計算方法にも手がつけれなかった。さらに肥後藩と
の取引では

一 七〇銭壹貫五拾匁

と記帳され、福岡藩との取引きでは

一 八十文銭壹貫目

という例が出てくる。これらは、各藩において違ってい
る。当時、これは銀一匁に対する銭の相場であると言われ
ていたが、同じ藩の取引きで、幕末まで変動しないのは、
なぜかという疑問が生まれた。

昭和三十七年、私は大学の在外研究員として渡欧、一時

この研究会から離れることになった。偶然、ボン駅前の路
地を歩いていたら、電気計算器がショウ・ウインドウに見
つかった。店で種々操作してみたら、加減には向かない
が、乗除の計算には、手廻し計算器とは比べものにならない
能力をもっていることが分った。値段も私個人で買える
位だし、これならば物価史の計算は随分楽になると、嬉し
くてたまらなかつた。ところが、下宿に帰って考えてみる
と、ドイツは二〇〇ポルトである。これを日本用に一〇〇
ポルトのモーターに変えられるか否かを、次の日に交渉に
行かねばならぬと思いついた。早速翌日「FACT」とい
うカバーをはずして、細かに点検をしながら、店員とモー
ターの交換が可能かどうかを交渉したら、いとも簡単に
「Ja」と答えて、一週間待ってくれ、とのことだった。

さらに気付いたのは、日本では六〇アンペアと五〇アンペ
アの地域に分れている、といったら、これも簡単に、どち
らでも動くようにしましょう、という返事だった。胸を踊
らせながら、一週間後に行ったら、チャンと出来上ってい
た。そしてトランスで一〇〇ポルトに落して実験してみせ
てくれた。私も種々操作したが、如何にもドイツらしく、
ゴツイ姿をしているが、機能としては申し分がなかつた。

早速、それを求めて帰ろうとして、持ち上げたら、なんと八kgあって、重さもドイツ的だなあと感心しながら持ち帰った。

帰国して、再び研究会に加わり、この最新兵器で乗除計算は飛躍的に楽になった。そして、銀錢勘定の方法は、殆ど計算だけは可能となった。

このような曲折があつて、銀錢相場とは異り、各藩独自の錢が一定の文錢で流通していることが明らかになった。そこで、匁単位を使用する錢貨であるから「匁錢」という概念を使うことにした。

だが匁錢が各藩によって異なるので、これは、一天領の一家史料では、その流通形態や本質的研究には、おのずから限界があることも分つてきた。それにしても、物価史の研究から、とに角、西南地域に「匁錢」なるものが使用されていたことの手掛りをつかむことができたことは、大きな副産物であつた。それからあと一〇年をかけて、まとめたのが『近世西南地域における銀錢勘定』（福岡大学論叢 一七卷一号、昭和四七年七月）であつた。当時、私は西海捕鯨業の経営史的研究も手がけていたが、長帳の複雑な計算も、物価史研究の産物である「匁錢」の認識があつた

ため、経営計算にも、余り苦勞せずに進めることができた。しかし、さらに多種の貨幣表現があることも亦、新しい発見であつた。幸か不幸か、今日、貨幣史研究にのめりこむことになつてしまった。

電卓が、いとも簡単に、安く買える今から三〇〜四〇年前のことである。

（ふじもと たかし・九州産業大学大学院教授、福岡大学名誉教授）